

4

般若野荘と油田条

奈良時代に成立した荘園制は、平安時代の終わり頃には衰退し、鎌倉時代になると再び盛んになりました。市内では、**般若野荘**と**油田条**という二つの荘園がありました。

般若野荘

般若野荘は、京都の公家である**徳大寺家**が領主となって平安時代末の12世紀に成立し、16世紀頃まで続きました。庄東・庄西地区を中心に広がっていた大きな荘園で、現在の“般若”という地名（般若・南般若・東般若など）の由来になっています。この地では二度、「般若野の合戦」がありました。

木曾義仲（源氏）の勝利

鎌倉幕府成立直前の1183(寿永2)年、源氏方の**木曾義仲**（源義仲）軍の**今井兼平**が般若野で平盛俊を破っています。その後、勢いがついた義仲軍は**倶利伽羅峠の合戦**で“**火牛の計**”という作戦によって西軍率いる10万の兵に対し5万の軍勢で大勝しました。市内には義仲軍が昼飯を食べたと伝わる**午飯岡**や、義仲が必勝祈願をした**川田八幡宮**（西宮森八幡宮）など義仲ゆかりの地があります。

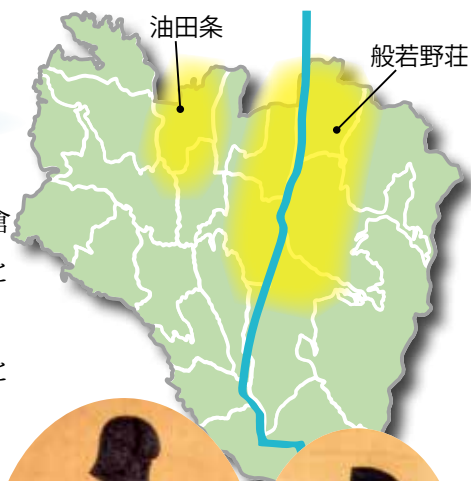
名越朝時（幕府方）の勝利

1221(承久3)年に幕府と朝廷の対立が表面化し、後鳥羽上皇が政権奪回を企てたことで**承久の乱**が起こりました。越中では**名越朝時**の軍勢が般若野で戦い、上皇方の勢力を降伏させています。その後、武士の台頭とともに荘園を管理する地頭が勢力をのぼし、14世紀後半には領家方と地頭方で**下地中分**（土地の支配を分けること）が行われました。近年の発掘で、般若地区の徳万頼成遺跡から荘園時代の道路と建物の跡が見つかっています。

油田条

油田条は、もとの庄川（旧千保川）をはさんで般若野荘の西側に広がっていた荘園です。現在の油田地区を中心とした場所と考えられます。

この荘園は鎌倉時代の13世紀後半に鎌倉幕府御家人の**平賀氏**が領主となったのがはじまりです。南北朝時代の14世紀には足利尊氏の部下である**町埜善照**に与えられ、町埜が京都の**太秦安楽院**に寄進しました。しかし、南北朝時代、2代将軍の足利義詮の手違いで貴族の冷泉家にも油田条の所有を認めてしまったので、120年間もの間、争いが続きました。



公卿九人塚 般若野荘領主の徳大寺実通が越中下向の際に殺害され、葬られたと伝わる塚（砺波市安川）



“火牛の計”の復元模型（小矢部市植生）